

# 働きたい

## がんと就労

3

摘出手術を勧める医師に対し、海外でどんな治療法が取られているのかインターネットなどで調べ、ほかの治療法がないかを医師に尋ねた。その結果、手術の場合は最低でも1カ月の入院が必要だと分かり、今度は仕事を続けながら通院治療する方法を選んだ。「自分が納得できる生き方を過すために、仕事から離れたくないと思った」と話す。

放射線治療を毎日しなくてはいけないため、県の疾病特別休暇制度を利用し、勤務時間は午前中の4時間。家族から「民間会社ならクビになる」と言われたこともある。休業補償制度や仕事を力バする要員が十分でない企業で働く人、パート従業員の立場の人は、自分のような働き方は現状では難しいだろうと思う。

だからこそ、がんを早期発見することの重要性を訴える。「早く見つかれば治療にかかる期間も少なくなり、会社も復帰支援をしやすくなる。行政や企業は、がん検診の受診率を上げる取り組みを進めてほしい」

# 早期発見の重要性 訴え

高島市の野崎安美さん(58)は、県大津・南部農業農村振興事務所(草津市)に勤務する職員。現在は子宮頸がんの治療を受けながら、農作物を加工食品にして農家の所得増につなげる技術支援をしている。

がんと闘いながら仕事を続けるのには、わけがある。長浜市内で働いていた46歳の時、乳がんと診断され、入院や自宅療養で10週間仕事を休んだ。当時は書類作成などのため、職場に1人1台パソコンが導入された時期。少しでも操作に慣れようと病室にパソコンを持ち込んで練習を繰り返したが孤独感は募った。「仕事をしていないだけで、社会から隔離された

## 長引く治療 募る孤独感



子宮頸がんの治療を受けながら仕事を続ける野崎安美さん＝守山市で

野崎さんは自身のがんの経験を積極的に話すよう心がけている。仕事の中で、がんを経験した農家の人と出会い、「2人で元気に働こうね」と励まし合ったこともあるという。「がんでも働けるという自分の姿を見てもらい、同じ立場の人に少しでも勇気を与えたい」。そんな気持ちで今、仕事に取り組む。